

# 世帯のレジリアンス測定方法としての児童の成長 — 新しい成長標準値に基づく児童栄養状態の再考 —

Thamana Lekprichakul<sup>1</sup>, 梅津千恵子<sup>1</sup>, 山内太郎<sup>2</sup>

<sup>1</sup>総合地球環境学研究所

<sup>2</sup>北海道大学大学院保健科学研究院

本論文では児童の健康と栄養状態を社会生態レジリアンスのフレームワークから検討する。「年齢に対して低身長(stunting)」、「身長に対して低体重(wasting)」、「年齢に対して低体重(underweight)」などの指標は、世帯がショックから回復する能力を決定する世帯の可能な資源に密接な関連があるため、栄養指標は世帯のレジリアンスを計測する方法として利用できると議論されている。本稿では、国レベルでのサンプル調査である生活状態モニター調査 (Living Condition Monitoring Survey) を利用し、5歳以下児童の栄養状態とその傾向を検討する。身体測定指標を WHO の 2006 年 WHO multi-growth center のデータに基づいて計測し、この結果を 1978 年ザンビア全国児童健康調査の児童標準成長曲線に基づくザンビア中央統計局(CSO)の計測結果と比較した。WHO の標準では標準児童の身長が 1978 年ザンビア全国児童健康調査の標準値よりも高いため、「年齢に対して低身長(stunting)」と「身長に対して低体重(wasting)」の割合が高くなることが明らかになった。「年齢に対して低体重(underweight)」の割合は、1978 年ザンビア全国児童健康調査の標準値より WHO 標準値と比較した場合では、標準体重が低いために低かった。ザンビアの就学前児童の栄養状態は、「年齢に対して低身長(stunting)」の割合が非常に高く、「身長に対して低体重(wasting)」の割合が低く、「年齢に対して低体重(underweight)」の割合が中程度であるという特徴を持っている。次第に、栄養不良状態は改善の兆しを示している。しかし、1991 年以来ザンビアの栄養状態の分類は変化していない。WHO の限界値分類で定められた栄養パターンでは、いまだに急性栄養不良の割合が低く、慢性的栄養不良の割合が危機的に高いことが特徴的である。しかし、深刻度が深まるような変化が正反対の方向に起こっている。児童を死に至らしめる急性栄養不良は、標準グループでは自然なレベルに近づいているものの、身体的・知的発達に障害となる慢性的栄養不良は 1991 年の構造調整のスタート時に比べるとさらに深刻になっている。約半数の児童が栄養不良である状況下では、ザンビア児童の栄養確保状況は不安定な位置にある。社会的もしくは生態的環境からの大きなショックが経済を直撃すれば、ザンビアの 5 歳以下児童は、全面的な栄養危機に陥ってしまう瀬戸際にある。